様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１２２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０２６０２

研究課題名（和文）スクールカーストの悪循環を緩和する学校外の居場所

研究課題名（英文）A Place Where one Belongs to Outside of School to Ease the Vicious Cycle of "School Caste"

研究代表者
小原　一馬（Kohara, Kazuma）

宇都宮大学・共同教育学部・准教授

研究者番号：２０３９６６１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：マクロミル社モニター調査、20～59歳2685名より回答。①中学でのスクールカーストがあったという認識は1970年代から2000年代まで上昇。②一方スクールカーストの特徴とされるクラスの風通しの良さと権力の集中の程度をたずねると、中学の前者は70年代から90年代末まで低下しその後急上昇。後者は2000年代まで高まりその後低下。つまり実質的なスクールカーストの拡大は1970年代に進み、その後は風通しが良いが権力の集中しているという「インフルエンサー型」が主流となっていた。③風通しの良さと権力の集中の同時拡大は高校でも見られ、これらが中高生の学校生活充実感を高めることに影響していることが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまでは2000年代以降、中高でスクールカーストが広がり、クラスの雰囲気が悪化していると考えられてきた。しかし実質的なスクールカーストが拡大していたのは1980年代初頭まであり、その後は別の形のクラスが一般的になっていた。それは携帯電話などによって、クラスの中での影響力を拡大させたグループが力をふるう一方、多様な価値観が認められ、誰もに発言権のある風通しの良いクラス（インフルエンサー型）でもあった。また高校では、大学進学率の拡大がこの変化を後押しした。こうした変化により、2000年代以降、中高では大多数の生徒が以前より充実した楽しい学校生活が送れるようになっていっていることがわかった。

研究成果の概要（英文）：Macromill Inc. monitor survey was conducted, responses from 2,685 respondents aged 20-59. (1) Recognition of the existence of so-called school caste in junior high school increased from the 1970s to the 2000s. (2) On the other hand, when asked about the quality of communication in the class and concentration of power, both of which are main characteristics of school caste, the former declined from the 1970s to the end of the 1990s, and then rose sharply. The latter rose until the 2000s and then declined. In other words, the substantial expansion of school caste progressed only in the 1970s. After that, the "influencer type," which is characterized by high-quality communication but concentration of power, became the mainstream. (3) The simultaneous expansion of better communication and concentration of power was also seen in high schools, and these were found to contribute to the enjoyable and fulfilling school life of junior and senior high school students in 2000s and 2010s in Japan.

研究分野：教育社会学

キーワード：スクールカースト　学級経営　生徒のQOL

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

スクールカーストという社会問題が日本において一般に認知されるようになったのは、２００７年に教育評論家の森口氏が『いじめの構造』においてその言葉を紹介した時からだとされている（鈴木２０１２）。そこからさらに遡っていくと、２００５年 masao_hate 氏により、はてなキーワードに「スクールカースト」が登録されたこと、同氏が、カルメン伊藤氏の９０年代末に用いた学校カーストという言葉を参考にしたことなどがわかっている。

しかしスクールカーストという言葉が生まれる以前にも、この言葉が指し示すような状況が広がっていたことは想像に難くない。しかし、どのように中学校・高校でそうした現実が広がってきたか、日本中にそれが実際どのように広がっているか、これまで全く研究されてこなかった。

２．研究の目的

日本の中学校、高等学校において、スクールカーストがどのように広がっていったのか、その原因と結果を示すことで、どのようにしたら中学校・高校のクラス内の人間関係をよりよい状態にすることができるかを示す。

３．研究の方法

マクロミル社に登録されたモニターに回答を依頼、２０歳から５９歳の１０歳刻みの各年代層に男女それぞれ３３０名を設定し、各地方ごとの人口比に沿って目標の人数を設定する。

アンケートは、５つのパートで構成される。最初と最後が年齢や性別、住んでいる場所、収入、既婚／未婚、子どもの有無などといったフェイスシート。２番目は中学生活について、３番目は高校生活について、４番目は現在について。２番目と３番目の質問は中学と高校とが違うだけでほぼ同じ内容である。

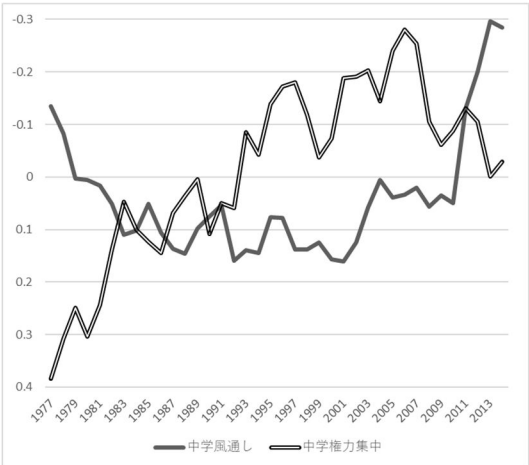
４．研究成果

中学に関する結果は、２０２３年８月に日本学校教育学会、研究大会にて発表を行った。その内容については現在論文を投稿準備中である。その主な成果は次のようにまとめることができる。

① スクールカーストという言葉が生まれる以前の中学のクラスの様子について、現在から振り返ったとき、「いわゆるスクールカーストが存在していた」とする回答が１９７０年代末から２０００年代にかけて中学校生活を送った者の中で増え続け、その後安定している事。

② 一方、中学校のクラスの雰囲気を、先行研究に基づき、クラスの風通しの良さと、権力の集中の程度によって、スクールカーストがあったかどうか判断するとき、スクールカーストは１９７０年代末から８０年代はじめまでの短い時期に拡大していて、１９９０年代末からはむしろ減っていっている事。
（なお「風通しの良さ」は、「みなの意見を聞く雰囲気」があり、「多くの人に活躍の機会」があり、グループ間の「交流の頻度」が高くて、「同性同士が全体的に仲が良く」、人気がある人は「誰に対しても親切」というような状態を指す。また「権力の集中」とは、「人気者は人気のない人を見下す」傾向があり、「グループ間に上下関係」が見られ、「人気者が一つのグループにまとまり」「しばしばいじめが見られる」傾向を示す。）
１９７０年代から２０１０年代までの、クラスの雰囲気はこの「風通しの良さ」と「権力の集中」の二つの変数によって、次のように変化している。

中学校のクラスの雰囲気の変化　（因子得点の三区間移動平均（学歴補正済み））



③ どのような場合に「スクールカーストがあった」と感じるかは、どの年代においてもクラスの風通しの良さと、権力の集中の両方が関係しているものの、２０代～３０代の世代と４０代～５０代の世代とでは、風通しの良さの影響が異なっている事。４０代～５０代では、スクールカーストがあったとみるためには、クラスの風通しが悪かったという条件がより強く働き、若い世代では、スクールカーストがあったと考える上で、風通しの悪さの影響を受けにくい。つまり、若い世代は風通しが良くても、権力の集中さえみられればスクールカーストがあったと感じやすい。

④ 先行研究では、風通しの良さと権力の

集中は互いに関係あるものと考えられていたが、実際には相関がない事。

⑤　１９９０年代から２０１０年代までの間に、中学校では、権力は集中しているが、風通しは良い「インフルエンサー型」と名づけたタイプのクラスが増え続けている事。

⑥　このようなインフルエンサー型のクラスは、情報化によって広がったと考えられる事。

高校についての結果は、宇都宮大学教育学部教育実践紀要にまとめた（小原一馬・林美輝 2023「なぜ日本の高校生活がより楽しく、充実したものになったのか―大学進学率の上昇と情報化による、疎遠型クラスの減少」宇都宮大学教育学部教育実践紀要 10 号）。

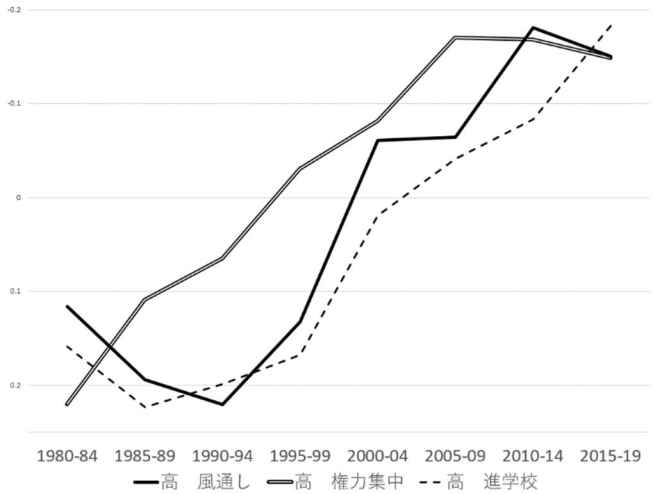
この論文では、２０代から５０代の成人男女に中高生活を振り返ってもらったとき、先行研究と同様、より後の世代で学校生活の充実感が高まり、学校生活を楽しいと感じる割合が増えていることを示した上で、学校の人間関係の変化によってそれが説明できることを示している。

つまり、１９９０年代から２０００年代にかけて、グループ間のつながりや多元的価値観を示す「風通しの良さ」が高まり、それらは大学進学率の上昇と情報化によって引き起こされていることがわかった。

これまでも、大学進学率の上昇とともに中高生が受験勉強やその競争を勝ち抜くことについて価値を認めるようになる「まじめ化」が進んでいることは様々な調査で確認されており、勉強にまじめに取り組むことは良いのだが、その視野の狭さが心配されていた（樋田 2015 「序章１学習をめぐるうれしい変化と心配な変化」 ベネッセ教育総合研究所『第５回学習基本調査データブック』、尾嶋・荒牧 2018「進路希望と社会意識の変容――３０年の軌跡」同編『高校生たちのゆくえ―学校パネル調査からみた進路と生活の３０年』世界思想社他）。

しかし本調査・研究を通じて、そうした「まじめ化」は一方で、中学・高校の人間関係において多様な価値観を認め合い、ともに協力し合う雰囲気を形成することで、中高の学校生活により積極的に参加する層を拡大する効果を持っており、それが多くの中高生にとってより充実した楽しい学校生活につながっていったことを示すことができた。

高校のクラスの雰囲気の各因子得点の変化（学歴構成補正済み）



また高校でも、中学同様、1980 年代から 2000 年代にかけて、権力の集中は進んでいた。ただ 1990 年代以降は同時に風通しも良くなっていったので、より充実した学校生活を送る者の割合はむしろ高まっていった。

こうした高校生活の経験は、成人後の幸福感にも大きな影響を与えていた。高校生活充実の幸福感への影響は、収入や結婚の有無などをはるかに上回る影響を与えていた。またこの充実感の影響をコントロールした後であっても、風通しの良いクラスで高校生活を送ったと感じている者の現在の幸福感や生活充実度は、収入の影響と同程度の影響を与えていることもわかった。一方、権力が集中していた事、進学校であったことは、現在の幸福感や生活充実度にほとんど影響をあたえていなかった。

つまり、権力が集中している（「人気者は人気のない人を見下す」傾向があり、「グループ間に上下関係」が見られ、「人気者が一つのグループにまとまり」という傾向）があったとしても、それほど心配には及ばないということである。そのことよりも、その後に明るい人生を送っていく上では、はるかにクラスの風通しをより良くすることが重要であることがわかった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 小原一馬　林美輝	４．巻 10
２．論文標題 なぜ日本の高校生活がより楽しく、充実したものになったのか―大学進学率の上昇と情報化による、疎遠型クラスの減少	５．発行年 2023年
３．雑誌名 宇都宮大学教育学部教育実践紀要	６．最初と最後の頁 ー
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小原一馬	４．巻 71
２．論文標題 スクールカーストはなぜ生まれ、それは「悪い」ものになってしまうのか　――スクールカースト生成の歴史的要因と上位者の攻撃性が高まる要因の考察	５．発行年 2021年
３．雑誌名 宇都宮大学共同教育学部研究紀要	６．最初と最後の頁 149-169
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 小原一馬
２．発表標題 スクールカーストの起源とその新しいかたち　ー中学高校のクラスの雰囲気の 歴史的変化
３．学会等名 日本教育社会学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 小原一馬
２．発表標題 日本の中学校の生徒間関係の変遷とスクールカースト
３．学会等名 日本学校教育学会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	林　美輝 (Hayashi Miki) (80547753)	龍谷大学・文学部・教授 (34316)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関